



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	2017年 東京学芸大学主催 国際シンポジウム実施報告 師範学校アーカイブズの現状と課題：20世紀東アジアの教育と向き合う( fulltext )
Author(s)	及川,英二郎
Citation	東京学芸大学大学史資料室報, 5: 30-31
Issue Date	2018-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/159352">http://hdl.handle.net/2309/159352</a>
Publisher	東京学芸大学大学史資料室
Rights	

## 2017年 東京学芸大学大学主催 国際シンポジウム実施報告 師範学校アーカイブズの現状と課題—20世紀東アジアの教育と向き合う—

人文科学講座教授（大学史資料室室員） 及川英二郎

2017年11/18（土）、東京学芸大学主催で「師範学校アーカイブズの現状と課題—20世紀東アジアの教育と向き合う—」と題する国際シンポジウムを開催した。これは、文部科学省「平成27年度特別経費（プロジェクト分）—文化的・学術的な資料等の保存等—」の一環として大学史資料室が行っている師範学校のアーカイブズ・システム構築という事業の延長として実施した企画である。

東京学芸大学では2012年に大学史資料室を立ち上げ、史資料の収集にあたってきた。現在、近代における師範学校に関する史資料の所在確認とあわせ、国内外の資料状況や施設機関の運営について調査を行っているところである。

周知のように、「学芸大」という名称は、戦後の民主化政策のなかで、師範学校の戦前・戦中期における負の歴史を反省するところから提案された名称である。本学で師範学校に関わる史資料を収集するということは、そうした歴史と向き合い、それを正視することと無関係ではない。さらに、植民地における師範学校について取り上げ、その史資料のあり方を検討するという場合、その残存状況の非対称な現状も含め、植民地支配が持つ負の歴史と向き合い、それを正視することを避けて通ることはできない。本シンポジウムは、そうした問題を考察するにあたって、その前提となる史資料の残存状況やその所在を確認するという基本的な作業を行うため企画した。文字資料や物資料・オーラルヒストリーを含め、それら史資料による裏付けのない議論は往々にして空論に傾斜しがちである。まずは研究の前提となる基礎作業に本格的に着手すること。それが本シンポジウムのねらいである。

当日は、午前9時30分に本学学長・出口利定氏による開会のあいさつと、大学史資料室副室長・藤井健志氏による経緯説明ののち、台湾の南華大学講座教授・楊思偉氏より「台湾におけるアーカイブズの現状と課題—日本植民地師範教育史を中心に—」と題する報告を1時間。ついでソウル市立大学校名誉教授・鄭在貞氏より「韓国におけるアーカイブズの現状と課題—師範教育史を中心に—」と題する報告を1時間行った。その後、昼食をはさみ本学教授・岩田康之氏より「日本の教員養成史研究とアーカイブズの役割」と題する報告を1時間と、大学史資料室専門研究員の小正展也氏と戎子卿氏より、それぞれ「東京学芸大学における資料収集の現状と課題」、「データベース構築の現状と課題」と題する報告を30分ずつ行った。そして、本学教授で大学史資料室員の君塚仁彦氏によるコメントの後、全体討論を行った。総合司会は及川が行った。なお、昼食時には、1936年2月に作成された記録ビデオ『創立六十周年記念映画 思い出の青山』の上映会を行ったほか、閉会后、同時開催していた展示会「學藝今昔」の鑑賞会を行った。

楊思偉報告では植民地時代の教育制度の変遷、師範学校の沿革、台湾に所蔵されている当該期日本関係資料とその調べ方、教育関係と師範学校のアーカイブズに関する分析、研究成果の分析など、詳細な説明があった。鄭在貞報告では、師範教育に関する資料保存機関が韓国にない現状について問題提起されたうえで、植民地期をはさんだスパンでの師範教育の形態と変容、師範教育に関する研究動向とアーカイブズの現況などについて、データ目録とあわせて説明があった。また、岩田報告では日本の教員養成史と研究動向、旧制師範学校から教育系大学への転換、教育系大学におけるアーカイブズの意義などについて説明があった。そして全体討論では、植民地支配や師範学校などの呼称に関する問いや留学生の実態、アーカイブズの本質的意義や資料保存の実態などについて質疑応答があり、午後5時、本学副学長兼大学史資料室長・大石学氏による閉会のあいさつをもってシンポジウムを終了した。当日参加者は39名（本学教職員17名、本学学生3名、その他19名）。テーマの重要性に比して、参加者数が伸び悩んだ点は残念であったが、数々の重要な論点や課題がその場で共有できたことは大きな成果だったといえるだろう。

今日、植民地における師範学校について取り上げ、その史資料のあり方を検討するという作業は、まだ始まったばかりであり、今後進展させなければならないアーカイブズ研究の重要な課題である。戦後改革の積極的な意義を無化するような動向が国内外で散見されるなか、「学芸大」という名を冠した本学が、グローバルな水準で今後いかなる役割を果たしていくべきか。本シンポジウムが、そうした課題を歴史的に再検証する契機となれば幸いである。



シンポジウムでの全体討論の様子